

空爆下 ユーゴスラビアからのEメール

入江 礼子

現在（五月十二日現在）空爆に曝されているベオグラードには四年前OMEP世界大会で来日されたベオグラード大学のミリヤナ・ペシッチさんが住んでいる。空襲警報が毎晩のようにけたましく鳴り、最近の爆撃の影響でかなり頻繁に停電や断水が起こっているという。彼女からの便りは、今唯一の通信手段となったインターネット経由のEメールで運ばれてくる。このミリヤナさんからのメールを紹介しながら、

セルビア人の子どもたちの戦時下の様子の一部と彼女の動きをお伝えしたいと思う。

三月二十三日、NATOの空爆が開始された。標的は地方にある軍事関連施設であった。まさか、となかば信じられない気持ちでミリヤナさんにメールを送る。

三月二十六日付、ミリヤナさんより

「メールをありがとう。それに心配して下さったこと

も。私たちは大丈夫。でもいい経験とは言えないわ。

この戦いは双方にとって全く意味がないのですもの。

こんなことしたって、なんの解決にもなりません。ただ人が死んで、国が破壊されるだけです。待つこと以外なにもすることがないというのはとてもつらいです。私たちは空爆が長く続かないことを望んでいるけれど、どうなるかしら。様子をみるしかありません。それではみんな元気だね。ミリヤナ」

私たち家族はとりあえず、彼女が元気なのに安心し、一刻も早い空爆停止を望んだ。しかし、やがて空爆地域はベオグラード近郊に近づいてきた。

四月五日付 ミリヤナさんより

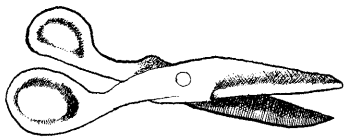
「メールをありがとう。昨夜の爆撃は軍事施設への爆撃でした。私たちの住んでいるところからは離れていますが、凄い音がしました。それでも爆撃の替わりに和平交渉が開始されるという望みを捨てたわけではありません。こんな状況ですがヤンコ（彼女の夫）も私も元気です。市内には母や妹たち家族が住んでいま

す。危ないのでこちらにくればと誘うのですが、こっちは来たくないみたい。大学も学校も閉鎖されています。この空いた時間に仕事をしようと思うのだけれど、集中できなくて。それではまた。ミリヤナ」

このあと、家族で交代で数回メールを出したが、なしのつぶて。頼りのBBCやCNNのニュースは空爆がベオグラード市内にも及んだことを告げるようになった。そしてテレビ局への攻撃。死者も出た。私たちの心配は頂点に達した。二十五日後、彼女から待ち待ったメールが届いた。

四月二十九日付 ミリヤナさんより

「メールをありがとう。あなたたちや友人たちからのメールが届くのでとても幸せです。でも時に返事を出すのが難しい。爆撃のこと以外書くことがないからです。多分情報はあなたの方が持っているかも知れないわね。こちらは昼間の生活はいつも通りにみえます



が、食料以外買えるものはほとんどなくなってしまいました。学校は休校、幼稚園もほとんど閉鎖されています。この状況は特にティーンエイジャーたちにとって過酷です。彼らはすることがないうえに、この事態の真実について大人より良く知っているからです。夜間、空襲警報は十二時間鳴り続けます。……ある誤爆では犠牲者十六人中十一人が子どもたちでした。……昨年の夏、あなたたちと一緒に渡ったノビ・サドの町にかかる橋も落ちました。……夜、眠れない時は「京都の寺」「江戸時代の美術」という本をみて、一生のうちにもう一度、今度は夫と共にあのお寺をみたいと思っています。……またメールを書いてね。ミリヤナ」

状況がかなり悪くなっているのが文面から読み取れた。テレビは空爆のターゲットを発電施設等市民生活を支えるものにまで上げたことを伝えていた。

五月五日 ミリヤナさんより

「二日前から停電と断水の時間が増えています。発電

所がやられました。市内に住んでいる母は停電のときに足を踏み外して転んで頭を打ち、病院に運ばれました。幸いたい

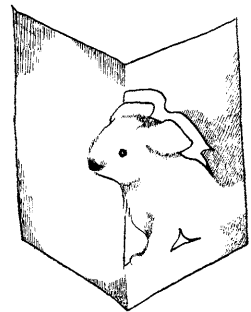
したことはなかったのですが。何かこの事態の終結にむけて始まってくれるといいのだけれど。また電気の状態がもとに戻ったらもっと書くわね。ミリヤナ」

ニュースはNATOが中国大使館を誤爆したことを伝えた。

五月十日 ミリヤナさんより

「金曜日から土曜日いっぱい停電と断水の中で過ごしました。中国大使館が誤爆された後、ここ二日間は空爆がなく静かです。

では子どもたちの話題に移りましょう。子どもた



ちはほとんど幼稚園に行っていないません。学校も休校になつたままです。落第もないというひどい決定が教育関係の省庁から出されました。高校入試もできませんし大学の入試も不可能です。

私たちは今、子どもたちに必要なこと、爆撃やそれに対する対処の典型的な反応、そして子どもたちの心に生じている防衛メカニズム（現実からの逃避、攻撃性、近所で知らない人に対する敵意、退行、恐れをも感じなくなること……、これは長い目でみれば彼らの発達に大きな損傷をあたえるかもしれません）について評定する調査を計画中です。この調査は予防法や心理療法、そして寛容教育（キレることを防ぐ教育）の計画に対してよりよい、より客観的な基礎を提供しなければなりません。そしてできるだけ早くスタートさせなくてはならないと信じています。

子どもたちの行動や反応の例をいくつか挙げてみると、三歳児の例―彼は間違いなく雷鳴と爆撃の音を聞き分けることができます（絶対に間違えない）。私の

住んでいる集合住宅の下で遊んでいる五歳から十歳の子どもたちはビニール袋と石を使って防空壕作りをして遊んでいます（来る日も来る日も作っては壊し作っては壊しているのです）。ある四階建ての建物に住んでいる子どもたちは最近ここに引越してきた私の友人とその子どもたちに対してだけ敵愾心を燃やしてしまうのです（この私の友人の家族は自宅がいわゆる空爆の警戒区域にあるためにこちらに来たのです）。

……それではまたね。ミリヤナ

一番寛容になれないときに「寛容教育」を計画するうえでより有効な手がかりを得ようと動き始めたミリヤナさん。民族同士の深刻な争いをくり返してきたバルカンの幼児教育研究者である彼女の、子どもにも「寛容教育を」という思いには切羽詰まったものが感じられる。具体的にどんなことを計画されているのだろうか。今度はそんなことを聞いてみたいと思つている。

（鎌倉女子大学）